『オランダの路上で出会った一枚の絵』

雨宮敏文

海外を旅すると、美術館の名画とはひと味違う魅力を持つ絵画に出会うことがある。私にとってそれは、街角で画家が描き、その場で販売している風景画だ。

入社 10 年目となる 1989 年秋、私はシェルの本社があるオランダのハーグへ赴任することになった。妻と、まだ幼稚園生と小学校低学年だった 2 人の息子も一緒についてきてくれた。子どもたちは平日、近くのアメリカンスクールへ通い、週末は日本大使館内の補習校に通っていた。

今でも鮮明に覚えているのは、ある週末のことだ。補習校へ子どもたちを送った後、着任時に家が決まるまで 1 ヶ月ほど宿泊したスヘフェニンゲン海岸（Scheveningen）のホテルでコーヒーでもと思い、足を延ばしてみた。
11 月に入り、海岸はすっかり冬の装いだったが、その日は幸いにも風が穏やかだった。海岸沿いの道を歩いていると、ひとりの老人が絵を描いており、その傍らに飾られた小さな 1 枚の絵に強く心を惹きつけられた。



それは寒い冬の海を描いた風景画で、どんよりとした灰色の空、荒々しい波、そして肌を刺すような冷たい風までが伝わってくるようだった。眺めているうちに、まるで自分自身が凍える海辺に立っているかのような錯覚を覚えた。しかし、その厳しい自然の描写の中には、どこか静けさと美しさが宿っていた。

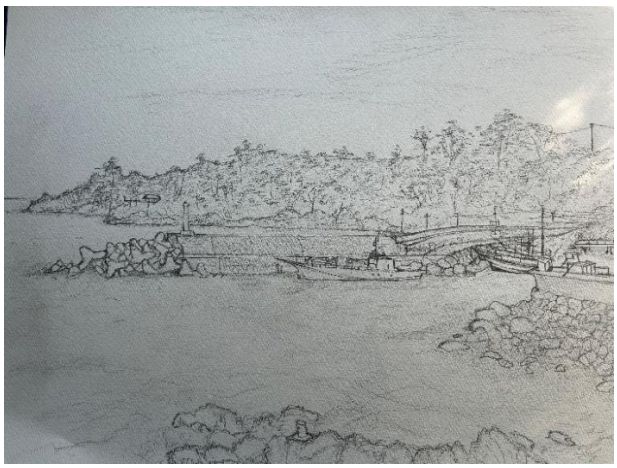
その老人の画家と言葉を交わしてみたものの、オランダ語だったため意味はまったく理解できなかった。それでも、彼の優しいまなざしとたくわえた髭の顔は、絵の強い印象とともに今なお心に残っている。
私がその後、海外を訪れるたびに路上画家に興味を持ち、絵を買い求めるようになったのは、まさにこの出会いがきっかけだった。

フランスでは、カフェの店先や石畳の道、行き交う人々といった何気ない日常の一場面が、画家の筆を通すことで温かな物語へと生まれ変わっていた。今でもその時買った絵を見ると、旅先で歩いた街の空気や、画家たちとの片言の会話が鮮やかによみがえる。

イタリアのベニスでは、水路に浮かぶゴンドラや、歴史ある建物の隙間から差し込む光が強く印象に残っている。水面にゆらゆらと映し出される街並みの色彩は、まるで夢の世界のようだった。

それらの絵画を見るたびに、いつかもう一度同じ場所を訪れ、彼らと同じように路上で描いてみたいとも思うようになっている。

今年５月に伊豆での美術部の合宿に参加し、路上でデッサンをしている際、通りがかりの見知らぬ人に話しかけられ、「素敵な絵ですね」 と言われたとき、どこか恥かしい思いと同時に、昔の自分を思い出し、胸の中に再び創作意欲が湧き上がってきた。



【スケッチ合宿でのデッサン】



【水彩画】『東伊豆の富戸漁港』（Ｆ６号）

路上で買った絵画は、決して高価な作品ではない。しかし、そこには画家との一期一会の出会い、その土地の空気感、そして旅の思い出が確かに刻まれている。部屋の壁に飾った絵を眺めるたび、私は再びあの街へと立ち返り、心躍る旅の続きを楽しんでいる。